

かた

がた

り

(十六)

文・小西一三  
絵・小西由紀子

## 出稼ぎと潟の漁 その①

羽立の安田春雄さんは現在、満七十四歳。当時としては一般的だった半農半漁の家に生まれた安田さんは、潟端の暮らしと八郎潟の移り変わりを見続けてきた方です。安田さんに戦前戦後の話をうかがいました。

## ほとんどの人はカラフトや北海道へ

あの頃は半農半漁といっても農地は少なく、働く場所もなかった。だから俺も高等小学校を卒業後カラフトに稼ぎに出た。十五歳の時だったな。当時、このあたりの人たちが出稼ぎに行くといえ、ほとんどがカラフトか北海道。木材関係とかニシン場の仕事だった。

カラフトには三年続けて稼ぎにいったども、そのうち戦争が始まって軍隊に入った。終戦になっても俺はシベリアで捕虜生活。羽立に帰ってきたのは昭和二十三年だった。翌年から春だけ北海道のニシン場に出稼ぎに行った。つくづく俺は北に縁のある人間だな。シベリアでも北海道でもシラミには苦しめられた。当時はみんな頭の上から葉をふりかけられたもんだ。

昭和二十七年から同じ羽立の児玉茂雄さんの家で一年を通して働くことができるようになった。これでやっと出稼ぎに行かなくてもいいようになったんだ。茂雄さんは俺より年上で、少年時代からずっと世話になっていた方だな。

漁の規模も漁の腕も浜(羽立)で一番の方であった。

干拓の前だから、そりゃ魚はいっぱいだ。茂雄さんは建網専門だよ。茂雄さんと弟さん、それに俺ともう一人の四人で漁をしていた。船は動力船二そうと動力なしが一そう。建網は大きな魚を捕る「雑建網」で、茂雄さんはその建網を三十も建てていた。

一つの建網には最低四つ以上の袋網がついているもんだから、袋網は全部で百二十以上もある。それを二そうの船で揚げるわけだども、一日で揚げられるものではなかった。主な魚はウナギ、シロメ、セイゴ、小ダイ、モゴなどだったな。

昭和30年代の写真を見ながら説明してくれた安田春雄さん。網を揚げてるのがご本人。



あのころは、味のいい  
いろんないろんな魚が  
たくさん捕れたもんだ...